



西照寺寺報「さいしょう」 第42号
2021年10月5日
発行 浄土真宗本願寺派 西照寺
高岡市吉久2丁目4-40
郵便振替口座 00780-8-8185 西照寺
西照寺WEB <http://nisitera.eek.jp>

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講お勤めいたします
お参りくださいませ

おつとめの時間

十一月六日(土) 午後二時(逮夜)〜

第十三世住職 大慈院釋義教 二十三回忌
第十三世坊守 願楽院釋尼 清幸 七回忌 併修

七日(日) 午前九時半(満日中)〜

布教使 小島 信師 射水市堀岡 聞光寺衆徒

※今年度はお齋(御膳)はありません。また、六日晚のお初夜はありません
法事につきましては、お供物ご仏前等ご辞退申し上げます。
お参りの折は、マスク着用をおねがいします。ご留意ください。

西谷山 西照寺



報恩講

今年も、真宗寺院や御門徒宅などで報恩講が営まれる時期に入りました。

報恩講は、本願寺三世の覚如上人が、親鸞聖人の三十三回忌に『報恩講私記』を撰述したことが起源とされています。宗祖親鸞聖人の命日を機縁に、救主阿弥陀如来並びに親鸞聖人の御恩を報謝する法要、集いのことです。現在西本願寺では、新暦に直した一月十六日の祥月命日までの七日間、「御正忌報恩講」が営まれています。それに全国からお参りできるように「お取越」と称して、事前に各寺院・御門徒などで営まれてきました。

私は、阿弥陀様や宗祖の御恩を報ずるとは、同時に先祖やまわりの人々、大自然の恵みなど、私に届けられているはたらき「恩」を感じ取ることであると思います。

「報恩」といってしましても、自分にはどんな働きが届けられているのか、私は何に支えられているのかを知る「知恩」ということが最初にあるはずで、それがなければ「報恩」の気持ち湧いてきません。人間は、自分の力だけで生きてるように思っても、そんな人は誰もいません。いろいろな人や物に支えられ、生かされている

というのが私のいのちの事実です。そう「知恩」し、気づいていくと「ありがたいな」「うれしいな」という「感恩」、感謝の気持ちが湧いてきます。それが「報恩」へとつながっていきます。

「知恩」↓「感恩」↓「報恩」の順になります。まず、「知恩」が大切です。

人間とって、この「知恩」がどんなに大切なことか。報恩講によって、その重要な意義を再確認し、真宗の最も大切な年中行事として先人たちは今日まで伝えてくださったように思います。

人生は苦なり

釈尊は「人生は苦なり」と説かれました。人間は、どんな状態にあらうとも「苦」から逃れることはできないということです。何故そうなっているのか。

我々の心の中には、あらゆる出会いや出来事を苦しみに変えていくシステムが組み込まれている。それは「我執・煩惱」である。その我執煩惱から解放されることが、さとりであり、苦から逃れた真の幸福であると釈尊は教えてくださいました。

それでは、どうやったら我執煩惱から解放されていくのか。

それは私の「いのちの事実」への目覚め、そこからのメッセージ

を受け取っていく歩みの中に展開されていくものと、仏教は教え
ているように思います。

普段は、これは自分の命だと思っています。確かにそういう私が
います。しかし、事実はどうなのかと点検していくと怪しくなっ
てきます。

私でしたら、両親をご縁にその先を遡ると限りない先祖とのつ
ながりのなかで、生まれました。自分の意志でこの環境を選んだわ
けではありません。一方的に与えられた命です。その命も、心臓一つ、
血液の流れ一つ、自分の力で動かしているわけではありません。大
自然の恵みもあります。私の意志を超えた、私の命を生かそうとす
る不思議としか言いようのない「はたらき」によって、生かされて
いる命です。

この命を持続させていくには、他の動植物の命を殺さなければ生
きていけません。また、最近「コロナ禍」ということで、人に会
えないので寂しいという方が結構おられました。人は、家族や友人
など多くの人のつながりや支えのなかで、喜んだり、悲しんだり、
生きる勇氣をもらったり、つながりの中で生きています。商品一つ
買うにしても、そこにどれだけ多くの人が関係し繋がっていること
か。

このように点検していくと、私のつくった私の命とは言い難く、
「無限のつながり」や「はたらき」のなかで生かされ支えられてい
るとするのが、「いのちの事実」でした。

私のものとは言えない、いろんなものが仮に集まって命の形を作
っている。釈尊はそのことを「縁起」と名付けてくださいました。
他の動植物は、それに従って生滅変化を繰り返しています。ところ
が、人間は途中から、これは私だという「自我」が生まれます。そ
うすると自分の都合の良いように生きることが幸せだ、喜びだとい
う、都合の良い自分に執着する私が生まれます(我執)。

たとえば、釈尊は老・病・死に思い至ったから、何故そのことを
苦としてしか受け取れないのか。それが出家の動機であったと伝え
られています。「老」の反対は「若」、「病」の反対は「健康」、「死」
の反対は「長生きとか、生」です。いのちの本体(根源)からする
とこれらは形の変化に過ぎず共に百点満点の命です。ところが、人
間は「若」「健康」「長生き」が良いことだと執着します。しかし、
いのちの本体は、違う道理で動いていますから、私の思うようには
ならず煩惱の苦しみから逃れることができません。

病気になると苦しい。この苦しみは、早くお医者さんに行つて病
気を治し健康になって幸せになってくれよ、
(裏面に続く)

(中面からの続き) という健康からのメッセージのように思います。ですが、釈尊はそれは、いのちの本体からの我執煩惱に気づいてくれというメッセージと受け取られた。

親鸞聖人は、阿弥陀様の願いを海に譬えられています。私たちは、その海の表面の波飛沫なんです。それを自分の命だと思つていますが、本体(本源)は海にもたとえられますが、無限のつながりの中のいのちです。そのことを仏教では「如」(二つ)と表現しています。

かたちの無い、時間的にも空間的にも無限なつながりですから、良く分からない。そういう私のために人格のかたちとなって現れ、気づけと呼びかけてくださっている姿を、如から来た人「如来」と仏教では表現しています。

『この一如宝海よりかたちをあらはして、法蔵菩薩となりのたまひて、無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿弥陀仏となりたまふ』(二念多念証文)と親鸞聖人はいただかれています。梵名のアミターバ(無量の光||空間的無限)、アミターユス(無量の命||時間的無限)の二つが合わさった言葉が阿弥陀です。その阿弥陀如来の全体を南無阿弥陀仏という名に込めて、気づけよとメッセージとして届けられている。

私は、死ぬまで我執煩惱から解放されることはありません。です

から、常にいのちの本体からのメッセージを聞きながら、自分の我執煩惱に気づき続けていく必要があります。

他の動植物を殺さずには生きていけない。或いは、自己中心的な我執に振り回されているという、自分の実態に対する懺悔も、いのちの本体のはたらきに気づく機縁になると思います。

報恩の営み

こういう「知恩」の営みから、生かされているという「感恩」、感謝の喜びが湧いてくる。それが「報恩」へと繋がっていきます。「いのちの事実」(本源)では、みんなどこかで繋がりに関係し合っていることに気づきます。私が幸せになろうとすれば、繋がっているみんなが幸せにならなければ、私の幸せも成り立ちません。ですから、自分のことよりも関わっているみんなの為に、自分を捨てて生きていく。そういうことが「報恩」の営みであり、そこに「極楽の世界(真の幸福)」がひらけていくと仏教は教えています。報恩講では、こういうことも味わい直してみたいことです。

合掌

(文責 住職)

